

校長通信

Morifun

<全校礼拝より>

新約聖書 コリントの信徒への手紙12章14節~22

皆さんは「ひとつ」という言葉から何をイメージしますか。みんなで一つになる、のような表現を普段使います。「ひとつ」という言葉にはみんなが同じになる、同じようになるといったニュアンスが含まれます。みんなで同じように一つになる、というのは私たちの社会で大事なこと、と同時に、場合によっては、それを人に強要したりすると問題が発生することになります。例えば、みんなと同じようにしないと、同じように行動しないと攻撃してしまったりもします。少し難しい言葉で同調圧力というのがあります。みんなで同じように——を強調し過ぎると同調圧力になってしまう場合もあります。

聖書の中にも「ひとつ」という言葉がたくさん出てきますが、聖書は必ずしも「ひとつ」という言葉をみんなが同じようになるという意味の言葉としては使っていない、むしろそれぞれに違いがあることを大切なこととして受け止めています。

では聖書では一つになるとはどういうことなのか、私なりに表現すれば、違いがありつつ一つである在り方です。このことを分かりやすく伝えているのが、コリントの信徒への手紙の中に書かれたものです。ここで手紙の著者のパウロは体のたとえを用いて、違いがありつつ一

つである在り方について伝えています。

私たちの体は色んな部分で成り立っています。色んな部分がそれぞれ異なった役割を果たしています。体の中にそれぞれ違いがあるように、私達一人一人にも違いがある、とされています。そしてその異なった役割は他ならぬ神様が与えてくれたものなんだと受け止めています。聖書では私たち一人一人に違いがあり個性があること、そのような一人一人の掛け替えの無さをとても大切なものとして受け止めています。一人一人には掛け替えのない役割が与えられているのです。パウロの例え話にあるように、目が手に向かって「あなたは知らない」と言えないように、頭が足に向かって「あなたは知らない」と言えない、私たちは本来他者に向かって「あなたは知らない」とは言えないのです。それぞれが大事な役割を果たしているのです。この体の例えで、もう一つ大事なことは、違いがありつつ、一つの体であること。

私たちの関係性というのもそういうものじゃないかとパウロは語っているのです。それぞれが足りない所を補い合って支え合っていることを伝えてくれています。神様は私たちを完ぺきではない存在として創ったのです、互いに補い合うことができるように、私たちがひとりぼっちで生きるのではなくて、一緒に生きることの喜びを讃えるために、あえて完全ではない存在として創ってくれたのかもしれない。どんなにすごい人でもどこか欠点というか短所があるわけですが、もしも本当に完璧な、何も欠点がない人がいたとしたら、その人はその分ひとりぼっちではないのかと考えてしまいます。

違いというのは時に対立とか分断の要因になることがあります。でも違いをあってはならないものとして否定するわけではなく、あっていいもの、あって素晴らしいもの、として肯定的に受け止め直していくことも大事なことです。そうした違いも受け入れて尊重し合っていくことを通して、一つに結び合わせていくことの大切さを聖書は私たちに伝えてくれています。

(9月7日 花巻教会牧師 鈴木道也先生)

新約聖書 マタイによる福音書 22章34節~40節

キリスト教に由来する言葉で、「隣人愛」があります。時折、私たちの世界でも使われることがあります。聖書の言葉で具体的には、39節にあるように『隣人を自分のように愛しなさい。』という教えがこの言葉の由来です。『隣人を自分のように愛しなさい。』を私なりに言い換えて、『隣人を自分と同じ一人の人間として大切にしまさい』と言っています。「隣人」と言えば、例えば皆さんの隣にいる人と言うだけでなく、もっと広い意味で、私たちが出会う人すべて、例えば、初対面の人、見ず知らずの人、に対しても「隣人」という言葉が使われます。

『隣人を自分と同じ一人の人間として大切にしまさい』ここで『愛しなさい』を『大切にしまさい』と言い換えているのは、心の中の好きとか嫌いとかの感情を別のもので、相手を尊重する、大切にすることを問われているのです。心の中では何を思っている、それは自由ですが、相手のことを好きになれなくても、別に構わないのです。心の中では相手が嫌いでも、相手を尊重しようとする、その姿勢が求められるのです。

「隣人愛」とは、自分が好きな人や友達とかにだけ当てはまるものではないのです。個人的には好きになれない人に対しても、この教えが適用できるのです。親しい人だけではなくて、初めて会った人、見ず知らずの人、直接知らない人に対しても、この「隣人愛」の教えが当てはまるのです。たとえ知らない人であっても、自分と同じ一人の人間に変わりないのです。自分の好き嫌いとか立場を超えて、相手を大切に、自分と同じ人間として大切に、それを教えてくれるのが「隣人愛」の教えです。



「隣人愛」の教えを実行するのはなかなか難しいことです。自分と意見が合う人は尊重できるけれども、例えば自分と意見が合わない人を大切にできるかはなかなか難しいことです。特に現在、コロナ禍で分断が広がっていると指摘されています。人と人との間に距離ができてしまっている、例えばウイルスをどう捉えるか、どういう風に感染対策を行うか、それぞれ考え方や感じ方が違ってきます。自分と違う意見の人を遠ざけてしまう。そういう風潮があるように思われます。

この「隣人愛」の教えが私たちに訴えたいのは、無理に仲良くするのではなく、少なくとも意見が合わなくても、自分と違う立場の人であっても、軽んじたり攻撃したりするのではなく、そういうことはしないと心に決める、その姿勢を伝えているのです。この教えを実行するのは難しいですが、この教えを心に留めておくことが今求められているのです。

最後に、この教えを考えるうえで大事なのは、自分も同じ一人の人間だということ、自分と同じように日々喜び悲しみながら、その人も生きている。自分が攻撃されたら悲しいように、相手も攻撃されたら悲しい、辛い。それらを思い起こすこと、特に人の痛みに対して想像力を働かせてみるのが、同じ一人の人間として目の前の人を受け止めることになるのです。この教えをイエス・キリストが一番大事な教えだと話しているのです。この言葉を折に触れて思い出して生活していきたいものです。
(9月21日 花巻教会牧師 鈴木道也先生)

<賞状伝達・全国大会出場報告会>

県独自の緊急事態宣言が解除されたことを受け、9月21日の全校礼拝の後に、久々に全校生徒が一堂に会し、学校行事を行いました。7月26日の終業礼拝以来、約2か月ぶりの全校集会でした。英語検定合格者、演劇部、新人大会が行われた陸上部そして野球部に賞状伝達を行いました。続いてインターハイ柔道競技と甲子園大会の報告会も遅ればせながら行うことが出来ました。

賞状伝達該当者

【英語検定】2級 畠山響 大矢結萌乃 榎林凜

準2級 瀧本百夏 堺田紋斗 黒澤優吏

【演劇部】優秀賞 県北・北盛岡地区高校演劇研究発表会

【陸上部】第72回岩手県高校新人陸上競技大会

3000mSC 第1位 天瀬海斗 第3位 工藤七斗

1500m 第2位 佐々木稼全

5000m 第3位 北田楓雅

(以上4名と女子800m佐藤花が東北大会出場予定でしたが大会は中止となりました。)

【野球部】第74回東北地区高校野球岩手県大会 第3位

1回戦 11-0 (5回C) 盛岡市立 2回戦 11-4 (8回C)

一関工業 準々決勝 12-6 (7回C) 花巻北 準決勝 6-12

花巻東 3位決定戦 8-3 花巻南 (東北大会出場)

<甲子園で思い出した話>

野球部が甲子園で2試合連続完封勝ちを収めたときに、昭和48年の盛岡三高以来だというニュースがあった。この年盛岡三高が甲子園初出場でベスト16進出の快挙を成し遂げたとき、私は三高の1年生。当時、私はバレーボール部に所属していて、その年は県で2位まで勝ち進み東北大会に出場した強豪チームでもあった(私はまだ貢献できていなかったが)。野球部とバレーボール部はライバル関係にあり(坊主頭で色黒が野球部、色白がバレー部)、甲子園に応援に行きたかったのだが、夏休み中であり常にバレーの練習と重なったため、涙を吞んで暑い体育館でボールを追っていた(実はブロック練習で右小指を骨折していたので、ボール拾いに汗を流していたのが真実)。甲子園には行けずとも、せめてテレビで応援をと考えていたが、なぜか練習時間とかち合い、仕方なくラジオを聞きながらの練習となった。当時はビデオなるものも存在せず、夜のニュースと翌日の新聞で試合経過を再確認。

3回戦に進むころには、堅実な高校生らしい勝ち方から「さわやか旋風」などとメディアに取り上げられ、こ

れが後に「さわやか三高」と呼ばれる所以となった。3回戦は県民体育大会と重なっていて(当時は8月のお盆の辺りに大会があった、勿論今はなくなったが少年の部である)、我々は陸前高田市に行き、2回戦で敗退(前チームとは雲泥の差である)。監督の先生は甲子園に応援に行っており(我々より甲子園を選んだのである、監督が居てもそれ以上勝ち進んだかは分からない)、バレーは素人の副顧問がベンチに借り物のように座っていた。陸前高田から電車で帰ってきた日、我が野球部は高知商に延長の末敗れたわけだが、我々はジャージではなく(お揃いのジャージなんて物はなく)制服での移動であった(三高の校章がついた学生帽もかぶっていた、坊主頭には学生帽、これ必需品)。盛岡駅について改札から出ると、何人かの市民から「ご苦労様...」の声、恐らく野球の応援と間違われたのだろう。我々も、まさか関係ないとは言えず、「ありがとうございます。」と声には出さなかったが、笑顔で会釈していた。

その後、我々は先生方から「さわやか三高生たれ」と口癖のように言われ続けるのであった。背中に「三高」という看板を背負っているまでの自覚はなかったが、「三高生」というプライドが徐々に芽生えていった気がする。バレーも野球に負けていられるかと練習により熱が入った。結果はそれほどでもなかったが...

今回の野球部の活躍も県民から注目の的となった。新聞の投稿にもあったし、本校を訪れる人からも、野球部員をはじめとする生徒達の挨拶が素晴らしいとお褒めの言葉もいただく。部活動というチームだけでなく、一人ひとりの行動が、その学校の評判にも繋がるというのは、嬉しいことでもある。教訓めいた話をするつもりはないが、みんなが盛附生であることにプライドを持って生活してくれれば、こんなに嬉しいことはない。

